

## 重言とコロケーション —その関連性と認め方—

俞 曉 明

Tautology and Collocation:  
A study of their relationship and recognition

Xiao-Ming Yu

*Received November 2, 2009*

### Abstract

"Jugen" (taotology) in Japanese is generally employed to refer to the phenomenon that two words sharing the similar meaning (synonym) are used repetitively, while "korokeeson" which originates from English loanword "collocation", denotes "customary or habitual combination usage of more than two words". In Chinese, it is translated as "(XiGuan shang de) DaPei". Compared with "Jugen", "korokeeson" has not been recognized and employed so widely, yet it is being gradually accepted by the academic field of grammar. Generally speaking, "korokeeson" belongs to the natural word, without specific complimentary or derogatory color. However, "Jugen" has a strong "negative" semantic direction, and it is usually taken as informal or even wrong. Thus, no matter from the perspective of the denotation or from the shade of emotion color, these two terms have little relevance. As a grammatical term, "Jugen" has not won enough "citizenship", needless to say the status of "korokeeson". What deserves our attention is that the boundary between these two terms has been blurred because of the unclear understanding of the two definitions, which consequently results in a mess in the conception explanation and the way of usage.

Based on the review and analysis of the previous study, this essay tries to point out its deviations and shortcomings, and strives to thoroughly designate "Jugen" and "korokeeson" and explore the relevance and relationship between themselves and with other terms. The

---

great importance is further illustrated that the grammatical terms should be standardized and systemized.

キーワード：重言，コロケーション，相関概念，認め方，関連性

## 1. はじめに

重言とは、ふつう「同じ意味の語を重ねた言い方」と定義され、一方、「コロケーション」は、英語の“collocation”の訳語であり、その意味は「二つ以上の単語の慣用的なつながり。連語関係」と解釈される（『大辞泉』増補・新装版，小学館，1998）。比較的広く知られる重言と比べて、コロケーションの方は、「あまり聞き慣れないことば」（金田一2006「まえがき」）とされるものの、近年の日本語学関係の研究において、術語としてだんだん受け入れられるようになってきた<sup>1)</sup>。しかし、一つの文法用語としての定着度がまだ低い、という点からすれば、両者はよく似ていると言えよう<sup>2)</sup>。また、ニュートラルな意味用法を持つコロケーションと違って、重言の方は、その記述内容、つまり定義の仕方や挙げられた語例を見る限り、往々にして人々にマイナ斯的・否定的な印象を与えてしまうということも事実であろう<sup>3)</sup>。

このように、重言とコロケーションは、その定義の内容から見ても、用語自体にひそむ言葉のニュアンスや感覚的イメージから見ても、大きな隔たりがあるため、あまり関連性のないものと思われがちであるが、両方とも単語レベルのものとして捉えられること、共に二つ（以上）の語から形成されたもの、という共通点も、双方の定義から読み取れることだろう。そして、もっと注目すべきは、実際に挙げられたそれぞれの語例を見比べると、両者の中には、同一のものが、一部でありながら共に含まれている、ということである。従って、なぜこのような問題が生じるのか、も含めてもっと深く考えなければならない。

本稿は、重言とコロケーションに関する先行研究の論述を踏まえた上、術語の意味内容と認め方、相関概念とのかかわり、両者の関連性、をめぐって検討してみる。

## 2. 術語の意味内容と認め方

### 2-1. 重言について

日本語の重言について、筆者は拙稿（兪2008）で、主に新聞記事データベースによる使用実態調査の結果に基づいて一通りの考察を試みた。が、本稿の展開のため、関連の部分を必要最低限に言及し、そして若干の新たな考察を加えながらまとめておこう。

まず、八つの辞典における「重言」の記述内容を表1のように整理した（「重言」の意味解釈と対照的に見るため、「かさねことば（重ね言葉）」を付け足して一緒に並べた）。

表 1

辞書名	重 言		かさねことば
	じゅうげん	じゅうごん	重ね言葉・重ね詞・重言葉・重詞
『国語大辞典・ 言泉』(小学館, 1986)	①同義の語を重ねて用いること。 「被害を被る」「犯罪を犯す」「馬 から落馬する」の類。 ②同じ字を重ねた熟語。「堂堂」 「悠悠」などの類。疊語。	= <u>じゅうげん</u> (重言) ①	【重ね言葉】①同じ意味の言葉、または、 <u>同じ語を重ねて用いること</u> 。「仮庵(か りほ)の庵(いお)」「せきにせく」など の類。重言(じゅうごん)。②語頭が同 音の言葉を誤りなく言う言葉遊戯。「生 麦・生米・生卵」の類。
『大辞林(第二 版)』(三省堂, 1995)	①同じ漢字を重ねた熟語。「堂々」 「森森」の類。疊字。 ②「 <u>じゅうごん(重言)</u> 」に同じ。	<u>同じような意 味の語を、意 味の重複に気 づかず、重ね て使う言い方</u> 。 「大豆豆」「馬 から落馬する」 の類。じゅう げん。	【重ね詞】①意味を強めるために、 <u>同じ 語や同じ意味の語を重ねて用いるもの</u> 。 「幾日(いくか)の日」「仮廬(かりほ) の廬(いお)」「濡れにぞ濡れし」の類。 ②同音の語や句を重ねて用いるもの。言 葉の調子を整えるため、また言語遊戯と して行われる。「東京特許許可局」「生 麦・生米・生卵」の類。
『大辞泉(増 補・新装版)』 (小学館, 1998)	① <u>同じ意味の語を重ねた言い方</u> 。 「豌豆豆(えんどうまめ)」「半紙 の紙」「馬から落馬する」など。 じゅうごん。 ②同字を重ねた熟語。「堂堂」 「隆隆」など。疊字。疊語。	⇒ <u>じゅうげん</u> (重言) ①	【重ね言葉・重ね詞】①意味を強めるた めに、 <u>同じ言葉、または同じ意味の言葉 を重ねて用いること</u> 。また、その言葉。 「降りに降る」「仮庵(かりほ)の庵(い ほ)」の類。②言葉の遊戯で、語頭に同 じ音のつく言葉をまちがえずに言うも の。「生麦・生米・生卵」の類。
『広辞苑(第五 版)』(岩波書 店, 1998)	①(ジウゴンとも) <u>同意の語 を重ねた言い方</u> 。「豌豆豆(えん どうまめ)」「電車に乗車する」 の類。②同字を重ねた熟語。「悠 悠」「滔滔」の類。疊語。	⇒ <u>じゅうげん</u> 1	【重ね詞】①意味を強めるために、 <u>同じ 言葉または同じ意味の語を重ね用いたも の</u> 。「濡れにぞ濡れし」の類。重点。② 言葉の遊戯の名。語頭に同音を有する言 葉を誤りなく言うもの。「長持ちの上に 生米・生卵」の類。
『日本国語大辞 典(第二版)』 (小学館, 2001)	① <u>同じことを二度言うこと</u> 。* 韓非子-八経「一用以務近習, 重言以懼遠使」 ②同じ字を重ねた熟語。「堂々」 「悠悠(ゆうゆう)」などの類。 疊字。疊語。 ③「 <u>じゅうごん(重言)</u> 」に同じ。	<u>同じ意味のこ とばを重ねて 用いた表現</u> 。 「豌豆豆」「半紙 の紙」「後の後 悔」「被害を被 る」「犯罪を犯 す」などの類。 じゅうげん。	【重言葉・重詞】① <u>同じ意味の言葉、ま たは、同じ語を重ねて用いること</u> 。「仮 庵(かりほ)の庵(いほ)」「せきにせく」 などの類。重言(じゅうごん)。(後略) ②語頭が同音の言葉を誤りなく言う言語 遊戯。「長持ちの上に生麦, 生米, 生卵, なたまめ七粒, 生米七粒」と言う類。

『角川国語中辞典（新装版）』（角川書店、1973）	<p>〈「じゅうごん」とも〉</p> <p>① 同じ意味の<b>ことばを重ねた熟語</b>。「豌豆（えんどう）まめ」の類。</p> <p>② 同字を重ねた熟語。疊語。「悠々」「堂々」の類。</p>	<p>同じ意味の<b>ことばを重ねて</b>言うこと。「あとの後悔」など。</p>	<p>【重ね詞・重ね言葉】① 意味を強めるために、同じ語や同じ意味の語を重ねて用いること。また、そのために用いた語。「幾日（いくか）の日」「ぬれにぞぬれし」の類。② 語頭に同じ音のある語を重ねていう言語遊戯。「ナナムギ・ナマゴメ・ナマタマゴ」の類。</p>
『新明解国語辞典（第5版）』（三省堂・1997）	<p>同じ意味が含まれている言葉を、<b>おもに口頭語で意味の重複に気づかず重ねて使う言い方</b>。じゅうごん。例、「うしろへバックする・これだけだけ・被害をこうむる・石を投石する」など。〔広義では、連文による熟語をも指す。例、「憎悪・好き好む〕</p>	<p>（見出し語なし）</p>	<p>（見出し語なし）</p>
『新版日本語学辞典』（杉本つとむ他、おうふう、1994）	<p>【重言】<u>じゅうげん（ごん）</u> 意・国 &lt;かさねことば&gt;とも。&lt;馬から落ちて落馬した&gt;のように、<b>内容・意味のまったく同一な語・句の繰返し</b>。&lt;年始のはじめ／多年の宿願／世界一周巡り&gt;など。&lt;の&gt;を介する場合が多いが、ときには重複ではなく、確認の意や理解を確実にさせるために用いる。話しことばでは、&lt;サイエンスの科学／ケミストリーの化学&gt;など意識的に用いる。&lt;文選読み&gt;にかよう精神と構造を持つ。</p>		

表1の各辞書の記述に対する考察を通して、次のことが明らかになった。

- 1) 重言という言葉には、「じゅうげん」と「じゅうごん」という二通りの読み方があるが、両者の意味解釈（内容の広さ）から見れば、後者（「じゅうごん」）のほうが前者（「じゅうげん」）の中に含まれている、ということが言えよう。
- 2) 「重言」（特に「じゅうごん」）と「重ね言葉」は同義関係にあると考える人もいるが、両者に挙げられたそれぞれの用例（又は語例）を比べてみると、興味深い現象が見られる。つまり、表1に掲げた8文献のうち、「重言」と「重ね言葉」を別々の見出し項目に取り上げた前7文献では、双方の用例（ともに①の意味用法）は真っ二つに分かれていて、重なるものは全く見えない、ということである<sup>4)</sup>。その上、「重ね言葉」は「意味を強めるため」の表現、つまり修辞法に属するものとされるのに対して、「重言」のほうは「意味の重複に気づかぬ」ことから生じた誤用に帰せられるので、両者は性質の異なるものとしか考えられないだろう。
- 3) 重言と言えば、前述したように、マイナス的な意味合い・ニュアンスを帯びる、あるいは一種の誤用だと思われがちであるが、実はこれは一種の誤解である。なぜならば、「重言」には概ね二つの異なった意味用法——①「同義（又は同じ意味）の語を重ねた言い方」、②「同字（又は同じ漢字）を重ねた熟語。疊語」——があり<sup>5)</sup>、これまで「重言」が問題視されてきたのは前者①のタイプに属するものだけだからである。換言すれば、②のタイプのものは、そもそも「誤用」とか「不適切な表現」といったマイナス的・否定的な評価の言葉とは全く無縁なものなので、重言を問題として取り上げて論じる場合、これ（②の部分）を切り離して考える（つまり妥当なものとして認める）のは当然なことであろう。

次に、重言の最も代表的な例とされる「犯罪を犯す」「被害を被る(受ける)」について、もう少し詳しく見てみよう。前稿でも述べたように、一部の重言現象(語の構成)をめぐって、学者の間でもはっきりした意見の食い違いが見られる。例えば、加茂(1955)は、重言を「意義的消化の不十分な漢語や外国語などの使用をあえてしようとする<sup>5</sup>ことから起る」現象だと考え、この二つを「やや長い語句」というパタンのものとしている。このほか、斎賀(1975)、須賀(2003)、工藤(2004)なども同様な趣旨を示している。一方、国広(1995)や白川(2003)において、これらのものは、人々の言語意識の変化に伴って、もはや「重言とは言えない」と主張している。

もし、「重言」を「同義(又は同じ意味)の語を重ねた言い方」という定義に従って考えるならば、「犯罪を犯す」「被害を被る/受ける」という類のものより、むしろ「むやみやたら」「二度と再び」「もう既に」「びっくり仰天」などの方がぴったり当てはまることだろう。なぜなら、前者において、動詞「犯す」「被る/受ける」とそれぞれ重なっているのは「犯(罪)」「被(害)」であって、つまり一つの単語(又は語)ではなく、その単語を構成する一つの形態素に過ぎないと解釈できるからである。一方、後者の「むやみやたら」や「二度と再び」などは、明らかに二つの独立した、しかも同じ意味を有する単語からできている。即ち、「むやみ+やたら」「二度と+再び」という構造のものである。にもかかわらず、これらを「重言」と考える人はまずいないだろう<sup>6</sup>。つまり、これらをそれぞれの前項(=「むやみ・二度と」など)の「強調形」と扱うのが一般的な考え方であろう。

また、兪(2001)に挙げた「選択制限のきつい結合」に属する擬態語——「にこにこ、めそめそ、がぶがぶ、ぶつぶつ、うとうと、よちよち、ずきずき」など——は、例(1)に示される通り、ある特定の語(動詞)を修飾し、両者の結び付きは固定的なものである。修飾先が決まっていて、その上、擬態語とその修飾先とは意味的に重複している(同義関係にある)ので、これらのものを「重言」と認めてもよさそうであるが、「副詞→動詞」という語構成であるため、修飾関係にあるものと一般的に捉えられている。

(1) にこにこ笑う/めそめそ泣く/がぶがぶ飲む/ぶつぶつ言う/うとうと眠る/よちよち歩く/ずきずき痛い/…

このように、ある語句(表現・言葉)を重言と見なすべきかどうかは、それが誤用に属するか否かということに大きくかかっていると見えよう。以上のことから、「重言」を次のように規定する。「同一形態素を有する語、または意味が部分的に重なっている単語同士が結び付いて用いられる言葉」という。そして、重言の認定基準として、①両者(または前項と後項)は同義語ではないこと、②両者の中に同一形態素が含まれること、③両者には同一形態素が含まれない場合、部分的な意味的重複を有すること、と考えている。

## 2-2. コロケーションについて

洋語からの訳語である「コロケーション」は、その原語の表記には二通りのスペリング(ローマ字の綴り方)がある、ということが文献調査で分かった。一つは、最も一般的に用いられる“collocation”であり、もう一つは、これとやや異なった形の“co-location”である(鈴木

編2006：840、「索引」より)。また、前述したように、コロケーションという言葉は、日本語の文法用語として一般化になってきたのはつい最近のことであるが、日本の言語研究に紹介・導入されたのはずいぶん前のことである<sup>7)</sup>。

さて、コロケーションとは何か、これをどのように規定したらよいのだろうか。

まず、冒頭に触れた『大辞泉』およびその他の幾つかの辞書における定義を並べておこう(下線はいずれも愈)。

- a. 二つ以上の単語の慣用的なつながり。連語関係。(『大辞泉』小学館)
- b. ①文や句における、二つ以上の単語の慣用的なつながり方。  
②→ハウジング(略)(『大辞林』三省堂)
- c. 「祝杯を」であれば「あげる」と言い、「さえずる」のは「小鳥」と決まっている。  
このような語と語との結びつきの関係をコロケーションと言う。縁語関係あるいは連語関係とも言う。(須賀2003 b)
- d. 「二つ以上のことばが結びついてできたことば」「連句とか、連語とか、縁語などと日本語には翻訳されている。」(金田一2006, 「まえがき」と「凡例」より)

上記した4文献のうち、aとbの記述内容は、それぞれの下線部に示されるように、ほぼ一致している。特に注目してほしいのは、二重下線部の「慣用的」という言葉である。つまり、コロケーションの定義を考える際、二つのポイントが重要視されている。一つ目は、「二つ以上の単語のつながり」、二つ目は「慣用的」、である。そして、文献cには、「二つ以上」「慣用的」という表現こそ書き込まれていないが、下線部の説明から、文献a・bと同様な立場をとっているということが容易に判明できるだろう。

実は、このような定義の仕方は、その術語自体と共に英語のほうから援用・導入されたものと考えられる。というのは、英語の世界では、「コロケーションとは慣習的に共に用いられる(2語以上の)語である」という定義が一般的に用いられているからである(松野・杉浦2004：80)。つまり、ここでも「共に用いられる(2語以上の)語」と「慣習的」の二つが重要なポイントとされているのである。それだけでなく、英語の場合、「コロケーションには統一的な明確な定義がない」ため、日本語のほうも、当然その影響を受け、同様な問題が起こっているわけである。具体的に言えば、英語の世界でも、「慣習的」という表現を考慮に入れず、「二つ(以上)の語が共に出現する(又は用いられる)」ことだけを「コロケーションの定義のコア」と考える人が多くいるように、日本語においても、「語と語のつながり」だけに注目して、「慣用的」なかどうかを全く問題にしない、という観点をもつ学者も少なくない。上記文献dもその一例である。

従って、もし文献a～cのような、二つのポイント——「二つ以上の単語のつながり」と「慣用的(又は慣習的)」——が共に定義に明記されるものを「狭義的な解釈」と言うならば、dのような緩やかな規定は「広義的な解釈」と言えよう。

このように、コロケーションの認定や範囲をめぐって、つまり、どんなものを「コロケーション」と考え、どこまでを「コロケーション」のものと認めるべきか、についてかなりの食い違いが見られるが、大きく言えば、広狭二つの立場があると考えられよう。

ところで、近年活発になってきたコロケーションの研究状況はどうであろうか。ここでは主

に『日本語学』の「コロケーション」特集号（2007-10）を通して詳しく見てみよう。この特集号には、全部で6篇の論文が掲載されているが、コロケーションに関する記述から、橋本（2007）のような狭義的な解釈をとるもののほか、ほとんど広義的な立場による解釈だと思われる。もっとも、共に「広義的な解釈」といっても、例えば村木（2007）と野田（2007）とでは、コロケーションの認定と範囲に対する説明にはかなりの開きがあるように思われる。では、この二つの文献を中心にもう少し詳しく見てみよう。

村木（2007：7）は、「コロケーション」を、「言語の単位として単語と文の中間に位置づけ」とし、次のように定義した（下線はいずれも兪、以下同）。

本稿は、現代日本語を対象とし、「コロケーション（語群、連語、語結合とも）を以下のように規定したい。「コロケーション」とは、「自立的な単語のくみあわせで、命名（名づけ、現実のさししめし）の側面のみをになった文法的単位」をいう。

村木氏によれば、「コロケーション」になれるものは、「主要な品詞」即ち名詞や動詞、形容詞、副詞などの「自立的な単語のくみあわせ」である<sup>8)</sup>。一方、「非自立的な単語」または「単独では文の成分となれ」ない機能語（形式名詞・形式動詞・形式形容詞や補助動詞および後置詞などを含む）は、「もっぱら文法的な意味をもち、実質的な意味を欠くため、コロケーションの対象からはずしてよいであろう」と述べ、つまり、「基本的には単独で文の成分になれる」か否かを「コロケーション」の重要な認定基準だと解釈できる。

その上、「典型的なコロケーションとは、自立的な単語がくみあわさった、現実の現象からなりたっている分割しうるさまざまな関係をさししめしている文法的な単位である」とし、さらに、「典型的なコロケーションは、一方依存の単語の結びつきである。一つの核となる支配語と被支配語とからなる組み合わせである。すなわち、コロケーションとは支配語のもつ結合能力を問うことである。（中略）支配語になるのは、動詞、形容詞（形容動詞をふくむ）、名詞である。」と付け加えている<sup>9)</sup>。

上の説明の中で、特に注意してほしいのは、ともに「自立的な単語のくみあわせ」であるものの、「並列関係」と「相互依存関係」にあるもの、いわば比較的固定化された、慣用的な語と語の組み合わせは「典型的なコロケーション」と認められない、ということである<sup>10)</sup>。広義的な解釈という立場からすれば、このような規定は当然なことと言えよう。

一方、野田（2007：27）は、「コロケーションは、これまで、名詞や動詞、形容詞など、実質的な意味を表す語どうしの意味的なコロケーションを中心に研究が行われてきた」と指摘した上、「この論文ではコロケーションの範囲を広く取り、助詞や助動詞のような機能的な意味しか持たないものが関係する文法的なコロケーションを含めて考察した」ものであると明言している。

野田氏は、「コロケーションとは語（または成分）と語（または成分）のつながりのことであるが、語（または成分）どうしが構造的に直接関係していて、一方の語（または成分）が他方の語（または成分）の選択に影響を与える場合だけを指す。」（p18）と定義し、これをさらに「文法的なコロケーション」と「意味的なコロケーション」の二つに分けて考えている。即ち、「文法的なコロケーションというのは、ある語（または成分）が他の語（または成分）の文法的なカテゴリーを選択し、限定するものである」、「意味的なコロケーションというのは、

ある語（または成分）が他の語（または成分）の意味的なカテゴリーを選択し、限定するものである」、という。そして、両者の違いを、「文法的なコロケーション——「このようにしなければならない」という強いものが多い」、「意味的なコロケーション——「このようにする傾向がある」という弱いものが多い」、と分析している。

その上、文の構造からコロケーションを次の2類7類に分類した。

- I. 単文の場合（「田中が急に高橋の腕をつかんだ。」を例として）
  - i. 格成分と述語成分のコロケーション（「高橋の腕を」と「つかんだ」のようなつながり）
  - ii. 格成分の内部のコロケーション（「高橋の」と「腕」のようなつながり）
  - iii. 述語成分の内部のコロケーション（「つかむ」と「た」のようなつながり）
  - iv. 副詞的成分と述語成分のコロケーション（「急に」と「つかんだ」のようなつながり）
  - v. 副詞的成分の内部のコロケーション（「急」と「に」のようなつながり）
- II. 複文の場合（「駅に着いたとたん、雨がやんだ。」を例として）
  - vi. 従属節と主文のコロケーション（「～とたん」と「やんだ」のようなつながり）
  - vii. 従属節の内部のコロケーション（「着いた」と「とたん」のようなつながり）

語と語のつながりであるコロケーションを、「意味的」だけでなく、「文法的」な考察まで拡大して体系的に捉えようとする視点の斬新さは評価すべきであるが、「文法的なコロケーション」の具体例として、「とりたて助詞「しか」が述語成分の肯定否定というカテゴリーを否定に限定している」、「モダリティ副詞「ぜひ」が述語成分のモダリティを希望や命令・依頼などに限定している」（p19）が取り上げられていることから、この「文法的なコロケーション」と従来の文法用語「呼応（表現）」や「共起（表現）」などとの関連はどうなるのか、という疑問も生じてくるだろう<sup>11)</sup>。それだけでなく、氏は、「何をしたかどうかは」（一般的な「何をしたかは」に対して）というような言い方を「許されないコロケーションが許されるようになってきている現象」と位置付け、「文法的なコロケーションに反しているように見える例もあるが、そのようなものは歴史的に文法が変化していく途中の過渡期に現れる現象である」と肯定的な見方を示している。だとすれば、いわゆる誤用問題や重言の問題もかかわってくることになるだろう。

要するに、コロケーションという術語も、その定義の仕方や認定基準において大きな違いが見られるが、本稿は、基本的に村木（2007）に従うことにする。

### 3. 相関概念とのかかわり

専ら英語のコロケーションを考察対象にした松野・杉浦（2004）は、その先行研究に見るコロケーションの判定基準を次の六つにまとめた。即ち、(a) 語の組み合わせの頻度；(b) 語の組み合わせの結びつきの強さ；(c) 語の組み合わせの制限要因；(e) 語の組み合わせの統語的つながり；(f) 語の組み合わせの意味の予測度；(g) 語の組み合わせの連続性と距離（p85。(a)～(g)の番号は原文のまま）。そして、「研究者によって、これらの判定基準のうち1つを取り上げる場合と複数の基準を組み合わせる場合がある」と付け加えた。

一見すれば、よくまとまった、いかにも説得力のあるまとめ・整理であるかのように思われ



るが、(a)～(g)の内容をよく吟味して比べてみると、大変おおざっぱな、しかも読者を困惑させるようなものと言わざるを得ない。なぜならば、意味的に重複したものや似通ったものが混在しているからである。

具体的に言うと、(b)の「語の組み合わせの結びつきの強さ」と(c)の「語の組み合わせの制限要因」は、どう考えても両者の区別や境界線がはっきりしない。一般的に言えば、語と語の結びつきが強ければ強いほど、その組み合わせの制限も厳しくなり、逆の場合も同様である。日本語を例にしていうと、前に挙げた例(1)のような「選択制限のきつい結合」では、前者即ち「にこにこ」などの擬態語が、後者即ち「笑う」などの特定の語を修飾し、両者の結び付きが固定的なものなので、(b)と(c)のどちらにも当てはまると考えられるだろう<sup>12)</sup>。また、「にこにこ」と「笑う」は、「語Aによって語Bが予想でき、語Bによって語Aが予想できる」(松野・杉浦2004:83～84)という双方向の関係(村木(2007)の「相互依存関係」に相当)にあるので、「共に用いられる語を予想することが可能になる」、従って、(f)の「語の組み合わせの意味の予測度」にも深く関わっていると言える。

同様なケースはほかにも見られる。例えば、(c)(f)(g)の三つは共に「呼応」又は「共起」と切っても切れない関係があり、一方、(e)と(g)はみな「連用修飾」又は「副詞的成分」と密接な関係がある。

ところで、上の六つの判定基準に対する議論を通して、重言とコロケーションの考察にあたって、それぞれの相関概念との関わりについても検討を加える必要があると言えよう。

### 3-1. コロケーションと呼応・共起<sup>13)</sup>

野田(2007:27)は、「日本語学習者のコロケーションの誤用を防ぐための研究」の代表的な文献の一つに、曹・仁科(2006)を取り上げているが、この論文のタイトルには、「コロケーション」という用語が用いられず、そのかわりに、「共起表現」という言葉が本題と副題に一回ずつ登場している。これに関して、曹・仁科(2006:70)は次のように述べている。

語と語の組合せは、コロケーションと呼ばれることがあるが、コロケーションはまだ明確な定義がないため、本稿では、敢えてコロケーションという用語を用いず、「共起表現」とする。ここでいう共起表現とは、広い意味の「共に出現するもの」ではなく、一文中に見られる統語的な関係がある単語間の慣用的な組合せを意味する。例えば、「おいしい魚を食べる」という文の中で、「おいしい魚」と「魚を食べる」は共起表現になる。

上の説明から、少なくとも、①共起表現はコロケーションの同義語と見なされている、②共起表現(=コロケーション)は狭義的に捉えられている(「慣用的な組合せ」だから)、③「おいしい魚」や「魚を食べる」のような共起表現は「慣用的な組合せ」である、の三点が読み取れるだろう。ところが、①はともかく、②と③の記述内容を見る限り、自己撞着の感を禁じえない。なぜなら、「おいしい魚」や「魚を食べる」のようなものはごく一般的・恣意的な結び付きであって、「慣用的な組合せ」と認めがたいため、これは共起表現を狭義的に捉える、つまり「慣用的な組合せ」に限るという著者の立場とは矛盾しているからである。逆に言うと、「慣用的な組合せ」を「おいしい魚」や「魚を食べる」のようなものまで拡大して認める立場

は、広義的な解釈としか考えられない。

それだけでなく、この共同執筆論文の著者の一人である仁科氏は、別の共同執筆論文（スルダノヴィッチほか（2009：70））において、次のような見方を示している。

日本語における陳述副詞と文末モダリティの呼応は既に従来の研究で注目されている（註釈略）。ここでいう「呼応」はコーパス研究でいう「強い共起関係」として捉える。副詞と文末モダリティとの共起は、間に他の単語を挟むことがしばしばあることから、「遠隔共起」とも呼ばれる。（後略）

ここでは、「呼応」と「共起」および「強い共起関係」との関連も問題になってくるように思われる。

また、須賀（2003b：218）は、「コロケーションという関係は、語と語との間に存在する一種の語彙的な呼応である」と述べている。この指摘から、「コロケーション」は「呼応」の一部である、即ち「呼応＝語彙的な呼応（コロケーションも含む）＋文法的な呼応」というように解釈してもよからう。

### 3-2. 重言と誤用・慣用

「誤用」は、「慣用」（「一般に用いられること。普通に使われること」大辞林・下同）と「正用」（「誤用に対して）正しい用法」）に対して、ふつう「本来の用法と違った用い方をすること。まちがった用法」と定義される。つまり、「明らかに規範からはずれていて、一般に許容されない表現の仕方は、誤用と呼ぶべきものである」（佐治（1981））。

誤用と言えば、非母語話者即ち外国人日本語学習者に見る誤用の問題が思われがちであるが、実は中には、日本語母語話者による誤用も多く存在しているのである<sup>14)</sup>。もっとも、前者の場合、特に文法的な間違いなどがよく取り上げられ、様々な「誤用例」「誤用分析」「誤用研究」が行われている。一方、後者の場合、主に敬語の不適切な使用<sup>15)</sup>や重言現象などが問題視され、仮に明白な間違った用法といえども、これを「誤用」と言わず、一種の「ゆれ」或いは「乱れ」と見做して、即ち言葉（言語表現）の妥当性・許容度の問題とか言語意識の問題として取り扱うのがふつうであろう。従って、例えば近年の日本語母語話者に多く見られる「すごい＋形容詞」<sup>16)</sup>という類の表現や「ファミ・コンことば」（又は「接客表現」）<sup>17)</sup>は、誤用ではなく、「問題な日本語」と名付けられるのである。そして、一部の「乱れ」や「問題な日本語」は既に市民権をとり、或いは取りつつある段階に来ているので、近い将来、これらのものは「慣用」ないし「正用」と認められるのも当然なことと言えよう。

確かに、ある具体的な表現は誤用であるかどうか、みな簡単にはっきりと決められるものばかりではない。なかなか断定できない、あるいは一言では言い切れないケースもある。『平成17年度 国語に関する世論調査—日本人の敬語意識—』（文化庁文化教育部国語課、2006）には、次のような興味深いデータが記述されている（括弧内は、被験者の割合）。

- (2) a. 「うそをついてあとで後悔した」（「気になる」41.2%；「気にならない」54.4%）  
 b. 「早起きして行ったのに、順番を一番最後にされた」（同44.9%；同50.5%）  
 c. 「その方法は、従来から行われていたやり方だ」（同19.6%；同74.4%）

上例の下線部は共に重言の例とされる。が、この三つの言い方の適確性に関して、被験者の回答には大きな差が見られる。詳しく言えば、「後で後悔する」も「一番最後」も、「気になる」人と「気にならない」人との比率が随分接近しているのに対し、「従来から」における両者の比率は大きく離れている。にもかかわらず、実際には、これらのものは共によく使われている、ということがそれぞれの使用実態調査で分かった（兪（2008）を参照）。まさに、井上（1999:195）が指摘されたとおり、「使用率や「気になる」人の割合が分かったとしても、そこから「誤用」「ゆれ」「慣用」「正用」などの判断を下すのは、簡単には行かない」。

さらに、誤用と慣用（及び正用）を考える時、上のような個人差や地域差のほか、時代差という要素を考慮に入れて検討する必要もあるだろう。例えば、現代日本語では、「会社に勤める」は正しい言い方であるが、「会社に働く」は文法的な間違いであるため、明らかな誤用であり、これを「会社で働く」のように直さなければならない。ところが、鈴木（2003）によれば、明治から大正期にかけて、「台所／畑に働く」のような言い方が用いられていた。つまり、昔の「正用」が時代の変化とともに今日の誤用になったのである。このような通時的な観点からすれば、逆のパターンが現れてもおかしくない<sup>18)</sup>。要は、「誤用」も「慣用」「正用」も不易なものではないと言えよう。

### 3-3. コロケーションと慣用句・イディオム<sup>19)</sup>

関連概念のうち、「コロケーション」と深く関わっているのは「慣用句」（または「慣用語・慣用表現・イディオム」と「ことわざ」である。特に「コロケーション」と「慣用句」の関係に言及した論考が多く見られ、概ね二つの立場に分かれる。一つは、「包摂関係」という立場からの考察（即ち「コロケーション>慣用句」という関係）であり、もう一つは「連鎖関係」という立場からの考察（即ち両者を含む複数のものが隣接している、という関係）である。では、具体的に見てみよう。

金田一（2006）は、「包摂関係」という立場から、次のように述べている（下線は兪）。

ひと口に「コロケーション＝結びついたことば」といっても、日本語には膨大な数のコロケーションがあります。本書では、それらの中から使用頻度が比較的高く、また手紙やブログ、メールなどを書くときに役立つと思われる「知っておきたいコロケーションを、慣用表現も含めて約4,000ほど精選、収録しました。（中略）広くとらえれば、ことわざや警句の類もコロケーションといえますが、本書では原則としてことわざ、警句の類は取り上げていません。」（p2「凡例」より）

つまり、「コロケーション」の中には、「慣用表現」だけでなく、「ことわざ」や「警句」なども含まれる、というのである。そして、もう一つ注目してほしいのは、「本書では原則としてことわざ、警句の類は取り上げていません」と同氏は述べているものの、下記の表2に示されるように、「ことわざ」の例も多く収録されている、ということである。

表 2

	コロケーション (金田一2006)	ことわざ (荻久保2006)	故事ことわざ (尚学1986)	慣用句 (白石1977)
足元の明るいうち	○	○	○	○
仇を恩で報いる	○	○ (仇を恩にして報ずる)	○ (~で報ずる)	×
情けが仇	○	○	○	×
花より団子	○	○	○	×
火に油を注ぐ	○	○	○	×
氷山の一角	○	○	○	×
仏の顔も三度	○	○	○	×
右と言えば左	○	○	○	×
水と油	○	○	○	×
病は気から	○	○	○	×
足を洗う	○	○	×	○
油を売る	○	○	×	○
手に汗を握る	○	○	×	○
手も足も出ない	○	○	×	○
枕を高くして寝る	○	○	×	×
ピンからキリまで	○	○	×	×
骨と皮	○	×	×	○ (~ばかり)
手に負えない	○	×	×	○
気が置けない	○	×	×	○ (気が置ける)
目を三角にする	○	×	×	○ (~する)
頭が上がらない	○	×	×	○
耳が痛い	○	×	×	○
目に余る	○	×	×	○
懐が暖かい	○	×	×	○ (~が温かい)
尻が重い	○	×	×	○
指を銜える	○	×	×	○
口に合う	○	×	×	○
頭が固い	○	×	×	○ (頭が堅い)

山田 (2007: 50) も同様な見方を示し、「(前略) このように、同じくコロケーションといっても、そこには慣用句、連語、普通の句という三つの性質の異なる表現単位が区別されるわけである。」と述べている。そして、この三者の相違点を次のようにまとめている。

慣用句・連語・普通の句は、その境界が明確に区別しがたい場合もあるが、典型的には次のようにまとめられる。

(3) タイプ	語の結びつき	意味の慣習化
普通の句	自由	ない
連語	固定	ない

慣用句          固定          ある（原文は縦書き）

一方、村木（2007：13）は、「慣用句」と「コロケーション」の関連性を認めながら、両者の相違について次のように述べている。「慣用句は、単語のくみあわせという点ではコロケーションの一種であるが、できあいのものであり、意味をもった要素に分割できないという点で単語に相当する。」「コロケーションの固定性は慣用句の特徴ではあるけれども、慣用句であることの十分条件ではない。」「馬が いなく」「まゆを ひそめる」のようなコロケーションは名詞と動詞のくみあわせが固定的であるが、それぞれの単語が語彙の意味をそなえている点で、慣用句とは性質を異にする。」（下線は兪）<sup>20)</sup>。

そして、一般のコロケーション（自由なコロケーション）と異なり、「全体で単語並み」の慣用句——「泡を食う（＝驚きあわてる）」「白を切る（＝知らないふりをする）」——の特徴を、①構成要素のむすびつきの不規則性、②意味上の非分割性、③形式上の固定性、④単語性、⑤既製品性、の五つとまとめている（p12～13）。さらに、「固定性」と「慣用句性」の強さを基準にして、「典型的な慣用句」（＝A）から「自由なコロケーション」（＝D）までの階層性を明確にした（p13表2参照）。

須賀（2003）も、コロケーションと慣用句を「連鎖的關係」として捉えている。2-2でも触れたように、氏は、「語と語との結びつきの関係をコロケーション」と定義し<sup>21)</sup>、語と語との関係には、通常の結びつきから固定的結びつきまでさまざまなものがあると考えている。そして、「道草を食う」「鎌をかける」のような「結びつきが固定しているもの」を「慣用句」とし、これを「通常の結びつき」つまり「それぞれの語が自立して結びついているもの」（「牛乳を飲む」「新聞を読む」）と区別している。その上、「コロケーション」の位置づけについて次のように指摘している（下線は兪）。

明確に線を引くのは難しいが、コロケーションは、自立した結びつきと慣用句との中間的な関係のことであり、語と語との結びつきが、ある程度固定化し、慣用的に用いられるものをいう。コロケーションとは、語と語との統語的な関係における語彙的な側面のことであり、文法と語彙との中間的な領域にある現象である。（p216～217）

このほか、コロケーションは成句や連語および結合価構造、修飾構造などとも密接な関連があるが、これ以上深入りしないことにする。

#### 4. 両者の関連性

以上見てきたように、重言とコロケーションは、その定義の内容から見ても、用語自体にひそむ言葉のニュアンスや感覚的イメージから見ても、大きな隔たりがあり、よって関連性のあるものとはされてこなかった。現に、これまでの研究において、この両者の関連をまともに論ずるものは見当たらない。

ところが、国語辞典の説明に従えば、両者は共に単語レベルのものとして捉えられること、また、共に二つ（以上）の語から形成されたもの、という共通点もあるので、やはり両者の関連性を認めるべきであろう<sup>22)</sup>。実際、両者に挙げられたそれぞれの語例を見比べると、同一の

ものが、一部でありながら共に含まれている、ということが観察できる。例えば、ともにコロケーションに関する文献であるが、コロケーションの専門辞典である金田一(2006)の中には、重言の代表格とされる「被害を被る」などが収録されている。一方、須賀(2003b:218)は、「被害を被る」とか「募金を募る」といった表現は避けた方がよい」と明言しているので、これらを一種の誤用、即ち重言と考えてよいだろう。

すると、語と語の組み合わせが慣用的なのか誤用なのか、二つ(以上)の語に共起関係があるかないか、ということがコロケーションと重言を見分ける試金石的な存在と言えよう。「犯罪を犯す」「被害を被る(受ける)」「募金を募る」を例にして言うと、国広(1995)や白川(2003)のように、その共起関係や慣用性を認める立場を取るなら、必然的にこれを「コロケーション」として扱い、一方、加茂(1955)や須賀(2003)、工藤(2004)などのように、その共起関係や慣用性を認めない立場を取るなら、当然なことながら、これを一種の誤用つまり「重言」として扱うことになるだろう。

要するに、我々が「重言」と「コロケーション」を分けて考えるという言語意識の中には、文法的・意味的な規範性があるかないか、言葉の許容度が高いか低いか(誤用的なのかどうか)、という見方が大きく働いていると言えよう。

## 5. おわりに

以上をまとめると、「重言」と「コロケーション」の関係(境界線)を明らかにするためには、この二つの術語の定義や認定基準・範囲についてもっとしっかり考えなければならない。その際、それぞれの相関概念とのかかわりを視野に入れた総合的な研究が必要であろう。端的に言えば、両者の接点は「共起関係」と「慣用性」の認定にある。

英語の研究からスタートしたコロケーションという術語は、そもそも「慣習的に共に用いられる語の組み合わせ」と定義・限定され、一般的に広まったが、その後の研究の活発化に伴って、判定基準も多様化し、概念の規定もだんだん拡大されてきた。この「概念内包の拡大化」という現象は、近年の日本語学研究においても見られるが<sup>23)</sup>、研究活動の活発化を促進する反面、マイナス的な影響をもたらすということも看過すべきではないだろう。換言すれば、今後の日本語学研究の健全なる方向への深化のため、術語(文法用語)の規範性と体系化の構築も重要な課題になってくるだろう。

## 註

- 1) 例えば、『岩波日本語使い方考え方辞典』(北原保雄監修, 岩波書店, 2003)では、「コロケーション」を見出し語(須賀一好執筆)の一つに挙げている。また、金田一(2006)のような、「コロケーション」の専門辞書も公刊された。さらに、これを特集のテーマに取り上げる動きも見始める(『日本語学』2007年10月号, 「特集:コロケーション」)。
- 2) 詳しく言えば、下記の最も代表的な日本語学・日本語教育関係の専門辞書の見出し項目には、両者はともに収録されていない。『国語学大辞典』、『日本語教育事典』、『日本語百科大事典』、『日本語解釈活用事典』、『日本語表現・文型事典』(小池清治ほか編, 朝倉書店, 2002), 『新版日本語教育事典』、『日本語学研究事典』, など。ちなみに、『国語学大辞典』の前身である『国語学辞典』(東京堂出版, 1955)の方は、「重言」を見出し語の項目に挙げている。
- 3) 具体的には、次のような説明がある(下線は兪)。「同じ意味が含まれている言葉を、おもに口頭語

で意味の重複に気づかず重ねて使う言い方。』(『新明解国語辞典』(第5版))「(前略)これらは意義的消化の不十分な漢語や外国語などの使用をあえてしようとするところから起るので、国語の表現力が低下されることは否めない。」(加茂1955)「気付かぬまま使われる重言は意外に多い」(斎賀1975)

- 4) 「かさねことば」の例—「せきにせく、降りに降る、濡れにぞ濡れし、仮庵の庵、幾日の日」など。「重言」の例—「馬から落馬する、犯罪を犯す、被害を被る、電車に乗車する、石を投石する、うしろへバックする、豌豆豆(大豆豆)、半紙の紙、後の後悔、世界一周巡り、年始のはじめ、多年の宿願、これだけだけ」など。
- 5) ①の例は注4)を参照。②の代表的な例として、「堂堂・悠悠・森森・隆隆・滔滔」などがよく挙げられる。
- 6) もっとも、『日本語解釈活用事典』(村石昭三執筆)では、「疊語に似たものに重言があり、この方は同じ意味の二つの語を重ねる言い回しである。」と述べ、その例として「日日がたつ 後の後悔むやみやたら 馬から落馬した」を挙げている。
- 7) 例えば、『新言語学辞典』(安井稔編, 研究社, 1971)では、見出し項目の一つに「collocation(項目連結)」を挙げている。ちなみに、福島(2007)や村木(2007)によれば、英語教育の場では、日本人学者が編集した英和辞典にコロケーションが登場したのは遙か昔のことである(勝俣銓吉郎『新英和活用大辞典』研究社, 1939), という。
- 8) 但し、同氏の次のような指摘については、さらに検討する余地があると思う。  
「もっと 大きい」とか「とても うれしい」のような程度副詞と形容詞のむすびつき、および「もっと ゆっくり」のような程度副詞と情態副詞のむすびつきは、コロケーションの対象かどうかあやしい。なぜなら程度表現には言語主体の主観性をともなうのが一般的だからである。(p8)
- 9) ここで言う「名詞」には、「桜を(見る)」「歴史に(詳しい)」「公園の(桜)」なども含まれる。氏はさらに、「ふたつの自立語間にのみコロケーションをとらえる立場もあるが、支配語に支配される単語すべてのくみあわせをコロケーションとする立場もあろう」と述べ、「男が 桜を 見る」「彼が 歴史に 詳しい」「甲が 乙を 丙に 紹介する」など、結合価2と結合価3の例を取り上げている。
- 10) 氏は、「並列関係」の例として「山と川」「歌ったり踊ったり」「痛いだけの痒いだけの」を、また「相互依存関係」の例として「桜が咲く」「桜が美しい」を挙げている。  
なお、「相互依存関係」とは「主語と述語における、互いに他を前提とする」関係、「一方依存関係」とは「一方を核とし他方がその核に依存する」関係、という。
- 11) 例えば、須賀(2003a)は、「呼応」を次のように定義している。「助詞「しか」が使われると、「そうとしか思えない」「これしか残っていない」のように、それに続く述語は否定を意味する「～ない」となる。このように、一つの文の中で、ある特定の語が使われると、それに応じて述語も特定の表現となることを呼応という。(中略)呼応には、助詞によって示される成分が述語と呼応する場合と、副詞が述語と呼応する場合とがある。(後略)」  
「呼応表現」「共起(制限)」については、『日本語表現・文型事典』(前掲)などを参照。
- 12) 逆に、「選択制限のゆるい結合」では、例えば「ゆっくり」などは、不特定多数の動詞と結びつく(を修飾する)性質を持っているので、両者の結びつきの強さも組み合わせ上の制限も弱まってくる。詳しくは、兪(1999), 兪(2001)を参照。
- 13) ここでは、「共起表現」「共起関係」「共起制限」などをひっくるめて「共起」と言う。
- 14) 詳しくは、兪(2007a)を参照のこと。
- 15) 日本語母語話者の敬語使用の問題については、兪・張(2004)を参照されたい。
- 16) 詳しくは、北原編(2004: 77~78, 矢澤真人執筆)を参照。
- 17) 詳細は、塩田雄大(2004)「ファミ・コンことば」『月刊言語』33-11, 飯田朝子(2002)「<新・接客表現>はことばの乱れか変化か」『月刊言語』31-9, を参照。
- 18) 筆者が兪(2007b)で考察した「(時間数詞)ぶりにV」構文は、その一例である。
- 19) 慣用句について、『日本語教育事典』(「慣用表現」阪田雪子執筆)には、興味深い指摘がある。「慣用句の範囲は明確ではなく、「慣用句辞典」の類でも取り上げている範囲はまちまちである。(中略)慣用句とするか、一単語と認めるかは必ずしも一致していない。(中略)故事・ことわざの類を慣用句に含めることが多い。」
- 20) 松野・杉浦(2004: 87)によれば、英語においても、コロケーションは個々の語から意味が予測される組み合わせであり、イディオム(慣用句)は個々の語から意味が予想できない語のまとまりである、という。
- 21) 但し、氏の「「さえざる」のは「小鳥」と決まっている」という説明に関して、なお検討する余地があると思う。なぜならば、これは現代語に限る意味用法であり、古風な意味用法として、「(女や子どもが)集まってぺちゃくちゃしゃべる」とか、「(田舎者・外国人などが)意味のわからない言葉をししゃべる」という使い方もある(「大辞林」より。「大辞泉」も同じ)。同様なことは「吠える」についても言える。つまり、「犬やけものが威嚇などのために大声で鳴く」のほか、「どなる。わめ

- く」及び「人が泣く」(古風)の用法もある。
- 一方、「嘶く(いななく)」は「馬が声高く鳴く」に固定していて、典型的なものと言える。
- 22) もっとも、「重言」の定義における「語」と、「コロケーション」の定義における「語」とは、その意味内容が違う。つまり、前者の場合、片方が「付属語・機能語」であるケース(「従来/古来/かねてから」など)も含まれるのに対して、後者の場合、ともに「自立語」であるのがふつう。
- 23) 例えば「副詞」や「モダリティ」に関する定義と認定の多様化・拡大化。詳しくは、兪(1999)、兪(2004)を参照されたい。

## 参考文献

- 井上史雄(1999)『敬語はこわくない—最新用例と基礎知識—』講談社現代新書
- 大曾美恵子・滝沢直宏(2003)「コーパスによる日本語教育の研究—コロケーション及びその誤用を中心に—」『日本語学』22・4月臨時増刊号
- 荻久保泰幸(2006)『実用新ことわざ辞典』ナツメ社
- 荻野綱男・荻野孝野(2007)「日本語のコロケーション研究の歴史—計量言語学、自然言語処理などを中心に—」『日本語学』26-10
- 加茂正一(1955)『重言』『国語学辞典』国語学会編、東京堂出版(1973年23版発行)
- 北原保雄編(2004)『問題な日本語』大修館
- 木村睦子(2007)「格文法・結合価文法とコロケーション」『日本語学』26-10
- 金田一春彦・林大・柴田武編(1988)『日本語百科大事典』大修館(1995縮刷版)
- 金田一秀穂監修(2006)『知っておきたい日本語コロケーション辞典』(学研辞典編集部)Gakken
- 工藤力男(2004)「重言<過半数を超える>の論理—言語時評・二—」(エッセイ)『成城文芸』186
- 国広哲弥(1995)『日本語誤用・慣用小辞典<続>』講談社現代新書1250
- 国語学会編(1980)『国語学大辞典』東京堂(1993八版)
- 斎賀秀夫(1975)「「一番最初」は重ね言葉か」『言語生活』281(1975-2)
- 采正兼(1999)「同義語の重複(重語)」『スピーチ・あいさつ実例事典』池田書店, p65
- 佐治圭三(1981)「現代文法の特徴・その将来」『講座日本語学3 現代文法との史的対照』明治書院
- 尚学図書編集(1986)『故事ことわざの辞典』小学館
- 白石大二(1950)『日本語のイデオロム』三省堂
- 白石大二編(1977)『国語慣用語大辞典』東京堂出版
- 白川博之(2003)『重言』『岩波日本語使い方考え方辞典』(北原保雄監修)岩波書店
- 須賀一好(2003a)「呼応」『岩波日本語使い方考え方辞典』(同)岩波書店
- 須賀一好(2003b)「コロケーション」『岩波日本語使い方考え方辞典』(同)岩波書店
- 杉本つとむ・岩淵匡編(1994)『新版日本語学辞典』おうふう
- 鈴木英夫(2003)「明治の表現—格助詞「に」を中心に—」『日本語学』22-13
- 鈴木良次編(2006)『言語科学の百科事典』丸善
- スルダノヴィッチ、イレーナ・ベケシュ、アンドレイ・仁科喜久子(2009)「コーパスに基づいた語彙シラバス作成に向けて—推量的副詞と文末モダリティの共起を中心にして—」『日本語教育』142
- 曹紅荃・仁科喜久子(2006)「中国人学習者の作文誤用例から見る共起表現の習得及び教育への提言—名詞と形容詞及び形容動詞の共起表現について—」『日本語教育』130
- 中川秀太(2005)「動作性複合名詞と動詞との連合における重複表現について」『国文学研究』147(早稲田大学国文学会)
- 日本語教育学会編(1982)『日本語教育事典』大修館(1995縮刷版)
- 日本語教育学会編(2005)『新版 日本語教育事典』大修館
- 野田尚史(2007)「文法的なコロケーションと意味的なコロケーション」『日本語学』26-10
- 野村雅昭(1988)「二字漢語の構造」『日本語学』7-5
- 橋本和佳(2007)「名詞とそれを修飾する形容詞の関係」『日本語学』26-10
- 林史典・鶴岡昭夫編(1992)『15万例文・成句 現代国語用例辞典』教育社
- 飛田良文ほか編(2007)『日本語学研究事典』明治書院
- 福島一人(2007)「定義されたコロケーションとその有用性:コロケーション辞典執筆の見地から」『情報研究』36(文教大学情報学部)(オンライン)
- 村木新次郎(2007)「コロケーションとは何か」『日本語学』26-10
- 松野和子・杉浦正利(2004)「コロケーションの定義—コロケーションの概念と判定基準に関する考察—」『なぜ英語母語話者は英語学習者が話すのを聞いてすぐに母語話者ではないとわかるのか』(研究成果報告書・研究代表者杉浦正利)名古屋大学大学院国際開発研究科(オンライン・入手先 <http://sugiura3.sid.nagoya-u.ac.jp/project/nnscollocation/>)
- 安井稔編(1971)『新言語学辞典』研究社



- 山田進 (2007) 「コロケーションの記述と名詞の意味分類」『日本語学』26-10
- 俞晓明 (1999) 『現代日語副詞研究』(日本語版) 大連理工大学出版社
- 俞晓明 (2001) 「擬態語の構文機能に関する一考察」『日本文化論叢』1 (大連外大)
- 俞晓明 (2004) 「文法用語の意味解釈と使用実態—「陳述」「ムード」「モダリティ」をめぐって」『日本文化論叢』3 (大連外大)
- 俞晓明 (2007a) 「現代日本語における誤用と慣用」(北京日本学研究中心公開講座資料・未公刊)
- 俞晓明 (2007b) 「「(時間数詞) ぶりにV」構文に関する一考察—「初めて」との共起関係を中心に」『岡大國文論稿』35
- 俞晓明 (2008) 「日本語の重言をめぐって—その使用実態調査の結果に基づいて」『日本語文化研究』8 (北京大学) 学苑出版社
- 俞晓明, 张建华 (2004) “日语母语使用者的敬语误用问题初探—兼论与日语教学的关系” 《大连外国语学院四十周年校庆 学术论文集》长春出版社
- 渡辺富美雄・村石昭三・加部佐助編著 (1993) 『日本語解釈活用事典』ぎょうせい